

かながわの考古学

2014.3

公益財団法人 かながわ考古学財団

目 次

神奈川県における旧石器時代の遺物分布(その7) -B2層(まとめ)- 旧石器時代研究プロジェクトチーム	1
神奈川県における縄文時代文化の変遷Ⅷ -後期前葉期 堀之内式土器文化期の様相 その5- 縄文時代研究プロジェクトチーム	13
神奈川県内出土の弥生時代土器棺(3) -弥生時代中期後葉から古墳時代前期(その2)- 弥生時代研究プロジェクトチーム	17
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(11) -通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介- 古墳時代研究プロジェクトチーム	29
神奈川県における古代の鉄(4) -生産関連遺構の集成- 奈良・平安時代研究プロジェクトチーム	43
近世民家の集成(9) 近世研究プロジェクトチーム	57
個人研究論文 相模における国分寺造営以降の瓦生産体制について -国分寺・国府・国内諸寺間における瓦工人の動向について- 高橋 香	71

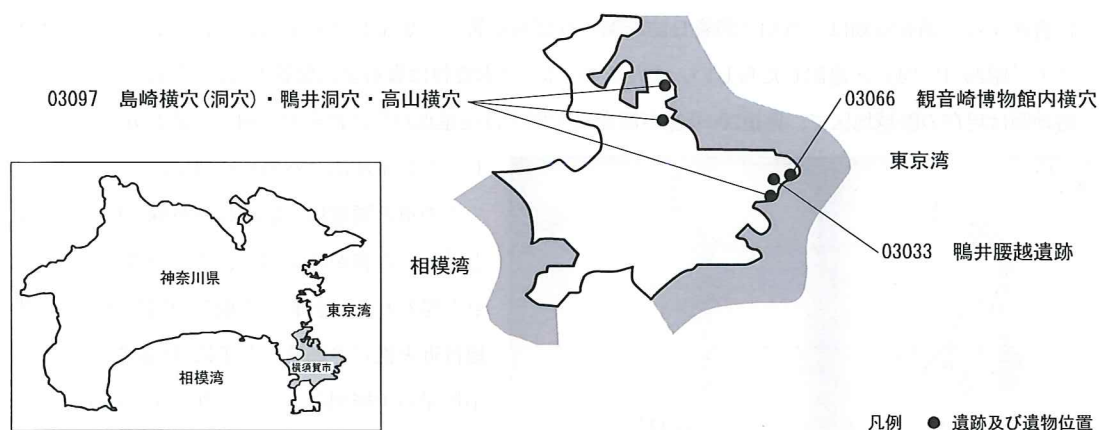
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(11)

— 通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介 —

古墳時代研究プロジェクトチーム

例 言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要第19号には横須賀市域にあたる03033・03066・03097番を掲載している。
- ・番号は埋蔵文化財センター年報14～18に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は横須賀市03033番：長友 信、03066番：長澤保崇、03097番：吉澤 健が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1. の細目は〔調査(踏査)年月〕〔資料保管場所〕〔記載内容概略〕とし、2. は〔(遺跡及び)遺物(遺構)概要〕〔掲載図書〕〔掲載図書概略〕〔小結〕などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものも多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第1図 対象遺跡及び遺物位置図

年報番号 横須賀市03033 鴨居腰越遺跡 横須賀市鴨居

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月]

1951(昭和26)年12月24日、1958(昭和33)年3月

[資料保管場所]

不明

[記載内容概略]

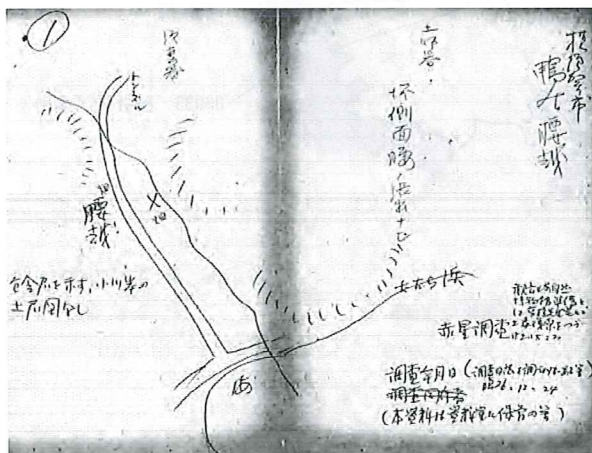
資料は、神奈川県立金沢文庫より赤星氏へ宛てられたと思われる『金沢文庫研究』用の封筒に収められている。料金別納郵便で送られたようで、封筒に消印等の日付は残されていない。封筒表面には「昭和24.4.29 []氏宅にて観音崎横穴出土品調査」、「腰越遺跡調 昭26.12.24」、「観音崎博物館用横穴出土土器 修理開始([]氏宅)昭28.5.16開始」との記入がある。このうち「腰越遺跡調 昭26.12.24」は下記に記載した資料①と思われるが、横穴墓から出土した遺物についての資料は見当たらない。なお封筒裏面には「鴨居出土土師器 昭33-それ以前」と「横須賀市 鴨居腰越遺跡」との記入がある。

2. 掲載資料の整理

[資料①]

1951(昭和26)年12月24日に鴨居腰越遺跡にて採取された遺物の実測図と観察所見である。用紙はB4サイズの反故紙であり、元は機械部品メーカーや工場などの住所を都道府県ごとに記載したリストか住所録であったらしい。9枚の用紙左側短辺をホチキス止めし、裏面を利用している。なお資料の状態は非常に悪く、長期間2つ折りされていたため、折り目部分がすべて破れてしまっている。9枚の内、1～7枚に出土遺物等についての記録がある。1枚目(第2図)は遺物採集地点の略図である。右上に「横須賀市 鴨居腰越」と縦書きし、右下に「赤星調査 観音崎自然博物館準備として []先生宅にて土器復原をつづけていたころ」と横書きする。調査時期は、当初「調査日誌を調べればある筈」と黒インクで記入していたが、後から青インクで「昭26.12.24」と追記したらしい。またその下に「(本資料は資料室に保管の筈)」とある。

略地図は現在の腰越地区で、県道209号線が観音崎大橋入口交差点からたたら浜へ向かう道と分かれて北上

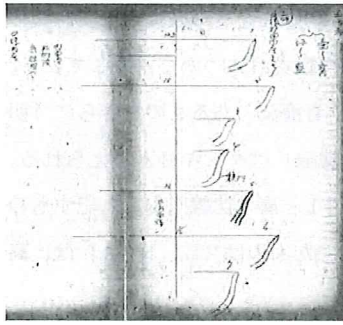


第2図 鴨居腰越遺跡遺物出土地点の略地図

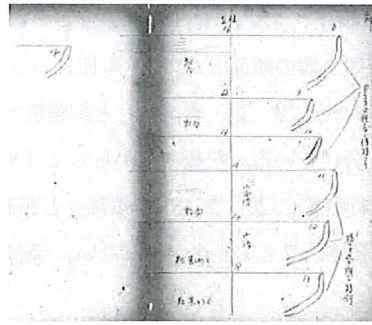
し、トンネルに至る場所を示す。

この道と腰越川と思われる波線との間に「畑」と「X」が書かれており、そこが遺物の採集地点と思われる。おおよそ現在の鴨居3丁目21番地付近と推定される。左下には「包含層を示す、小川岸の土層図なし」とあり、出土層位の記録はとっていないようである。また、地図上に何故か「土師器」「須恵器」「坏側面腰ノ張出ナシ」と遺物観察所見が記入されている。

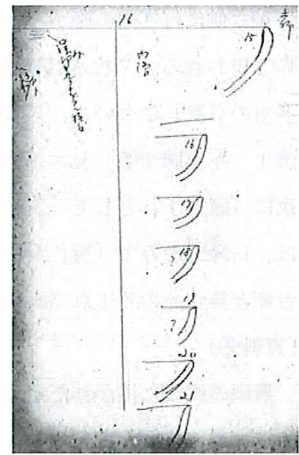
2～4枚目に土師器片21点の実測図が掲載されている。2枚目(第3図)の7点は、用紙右上



第3図 資料2枚目

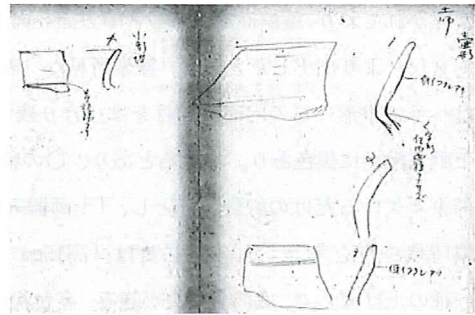


第4図 資料3枚目



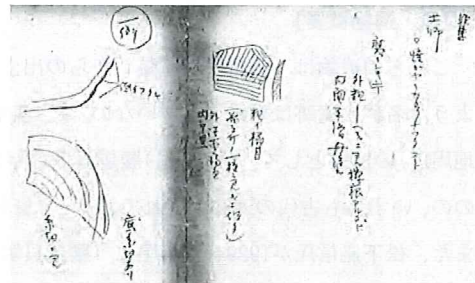
第5図 資料4枚目

に「壺～甕」「坏～盤」とあり、いずれも断面のみで外面は図化されていないが、口縁部内側に水平線を長く伸ばし、口縁径を推定している。右側には「土師 口縁外面内○○○」、左側には「内面滑〃」「外面滑〃」「底粗○ヘラ〃」「口縁内屈〃」とある。意味を取りきれない箇所が多いものの、外面下部に僅かに稜を持ち、口縁が外反するものを集めている。推定復元された口縁径と、低い器高から、壺や甕・盤との見解を示しているが、7世紀以降の坏と考えられる。



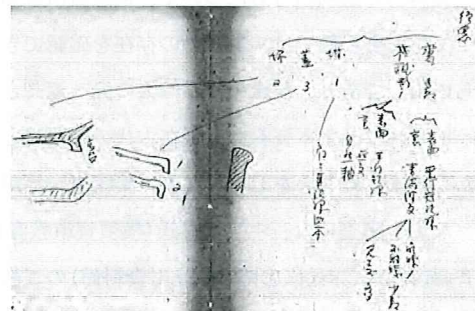
第6図 資料5枚目

3枚目(第4図)は右上に「土師」とあり、遺物番号8～10に「目立タヌ程○ニ 僅稜アリ」、11～13に「稜ナク丸ク底ニ移行」とある。遺物の内・外面部分にも注記があるが判読出来ない文字が多い。いずれも口縁が直立ないし内湾する鬼高式期の坏と思われる。4枚目(第5図)の15内面中央に「内滑」外面に「口縁外(辺カ)ニ丸クナデアル程(度カ)」とある。なお左側に「ヘラソギアト」とあるが、どのような調整なのかよくわからない。5枚目(第6図)は



第7図 資料6枚目

用紙右上に「土師 壺形」とあり3点の壺形土器口縁部片、「小形埴」として1点の口縁部片を掲載している。1の外面には「低イフクレアリ」「く字形 但内面稜ヲナサズ」とあり、3には「低イフクレアリ」と所見がある。「小形埴」には、「首ニ沈線アリ」とある。いずれも口縁のみで年代は特定しづらいが、直線的に立ち上がる口縁部から古墳時代中期に遡る可能性も考えられる。6枚目(第7図)は、刷毛目のある「甕ラシキ片」について「外粗ーヘラニヨル擦痕アルコト」「内面平滑丹塗」「粗イ櫛目」「(判読不明)」「外淡黄褐色」「内面黒」と記載する。一番右に「土師 焼がヤカタクナッタコト」とあるが、意味がよくわからない。

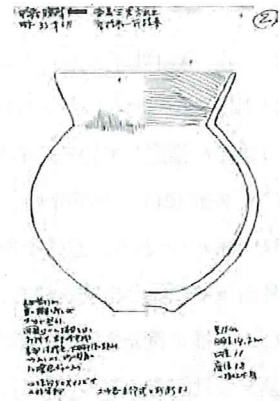


第8図 資料7枚目

用紙左側には底部の図が記され、「低イフクレ」「底 糸切りあり」とあり、糸切り痕をもつ奈良・平安時代の坏と思われる。7枚目(第8図)は須恵器の断面5点の他、図化していない複数資料について言及している。多数の「甕」について、「表面 平行短沈線 裏 青海波」と調整痕で分け、青海波のあるものをさらに「明瞭1 不明瞭少数 見エズ多」と分けている。記載内容からして「平行短沈線」はタタキ目と考えられる。次に「瓶形1」として「表面 平行短線」「裏 無文 自然釉」とある。「埴1 肩ニ沈線四本」と記すものは、口縁部のみで「肩」がなく、観察所見との整合がとれない。「蓋3」としたものは2点、「坏2」は、高台坏と無台坏の各1点である。

〔資料②〕

無地の厚紙に描かれた土師器壺の実測図である(第9図)。上部に「鴨居腰越■■■■方出土」「昭和33年3月■■■■氏持参」とあり、個人の宅地から出土した遺物を、郷土史家の■■■■氏が赤星氏のもとへ持ち寄ったらしい。裏面には出土地点の略図が描かれており、腰越部落から観音崎方面へ向かう道の北側、■■■■氏宅地の「深約2尺」より出土したという。観察所見は「表面整形あと 首～櫛目を残し他はヘラで整形 口の内面に櫛目をはっきり残す。若干丹色残る 表面淡橙色、下部僅かに黒色あり。ヘラあとあり、○の移動による擦痕○にあり。」「口縁部少々欠けるだけの好資料」とし、「土師器五領式と判断する」とあるが、古墳時代中期と考えられる。法量は「高15cm 胴径14.2cm 口径11 底径3.8 一種の上げ底」で、底部裏中央が窪み、高台状を呈することを特徴としている。



第9図 資料表面

〔遺構・遺物概要〕

これらの遺物は「鴨居腰越遺跡」からの出土品とされるが、現在の県や横須賀市の文化財地図等にはそのような名称の遺跡は登録されていない。『三浦半島考古学事典』によると、腰越地区(現在の鴨居3丁目21番地周辺)の遺跡として「(Y No.331)腰越貝塚(県台帳では腰越遺跡)」および「(Y No.326)三枚田遺跡」があるものの、いずれも古代の遺跡とされており、本資料のように古墳時代の遺物を出土する遺跡とはされていない。また、松下胤信氏が1929～30年頃に「腰越貝塚」で踏査を行っているが、土師器・須恵器類の採取を示す記載はあるものの、図等はなく、遺物の年代をはっきり示す内容ではない(松下 1930)。

資料①の遺物の行方について、横須賀市自然・人文博物館や、赤星氏旧蔵資料を管理している赤星直忠博士文化財資料館では、現在その存在を確認できないという。資料②についても所在不明だが、個人の宅地からの出土であり、記録の後、個人の元へ返却された可能性が高いと考えられる。

いずれにせよ本資料は、現在古代の包蔵地とされている腰越地区において、古墳時代の遺物が横穴墓以外から出土したことを示しており、集落遺跡等が存在した可能性を示す貴重な情報と言えよう。

なお本調査には、中三川昇氏(横須賀市教育委員会生涯学習課)、稲村繁氏(横須賀市自然・人文博物館)、斉藤彦司氏(赤星直忠博士文化財資料館)のご教示を得ましたことを申し添えます。(長友)

引用・参考文献

- 中三川昇 2009 「腰越貝塚」『三浦半島考古学事典』p97 横須賀市考古学会
 中三川昇 2009 「三枚田遺跡」『三浦半島考古学事典』p97 横須賀市考古学会
 松下胤信 1930 「三浦半島に於ける考古学的調査」『史前学雑誌』2-6

年報番号 横須賀市03066 観音崎博物館内横穴 横須賀市鴨居4丁目

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月日]

昭和23～24(1948～49)年。観音崎自然博物館の開設工事の一部として、当時から開口していた横穴群の見学通路を整備。それに伴って横穴内に残る埋没土の掻き出し作業が行われ、観音崎観光株式会社の依頼により■■■■氏が指導にあたった。当時既に、横穴内は掘り荒らされていたらしく残された部分についての記録となっている。■■■■氏が取り集めた出土遺物の復元は赤星氏が頼まれたと記録に残り、本資料(遺物写真)はこのころに撮影されたものと思われる。なお、昭和59年度に横須賀市人文博物館が実施した博物館教室「三浦半島の考古学」の野外学習において、横穴群分布図が作成されている(図10を参照)。

[資料保管場所]

観音崎自然博物館

[資料概略]

資料は、A4サイズ大の5枚の白色画用紙(以下、台紙と表記)に貼り分けられた出土遺物5個体分の写真であり、台紙には赤星氏の筆跡で「観音崎博物館構内横穴出土」の表題やメモが書き込まれている。以下、任意に資料①～⑤の番号を付し概略を記述する(写真1～5)。

資料①は、内面に放射状暗文の見える土師器坏の写真。カラー写真・モノクロ写真の2種類によって真上から撮影。2枚が横並びに配置され、色調・調整痕の特徴をそれぞれに写し出している。完形に近い遺存状態で接合および欠損部の修復は既に行われている。板床上での撮影(屋内か)。

資料②は、内底面に螺旋状暗文、外底面に同一方向のヘラ磨きを施す赤彩された土師器坏の写真。資料①と同様にカラー・モノクロの2種類によって特徴を表す。内面・外面をそれぞれ真上から撮影した計4枚を台紙に田の字型に配置して貼り合わせる。接合されてほぼ完形を呈するが、口縁の僅かな欠損部は修復されていない。資料①と同じく板床上で撮影される。

資料③は、須恵器高台付坏と蓋のセットをやや斜め上方から撮影。こちらはモノクロ写真1枚のみ。遺存状態は良好で、蓋は端部を極僅かに欠くものの割れない完形に見える。摘み部の右側に写る連続した平行線は背景まで続いておりフィルムの傷と考えられる。台紙には「横穴の年代推定に充分役立つ須恵器」という書き込み有り。調査時に撮影されたものか、遺物は貝砂上に置かれている。

資料④は、須恵器長頸瓶の写真。ほぼ真横方向から表裏両面を撮影した計2枚を横並びで貼り付ける。口縁部1/3が欠損するものの遺存状態は良好(未修復)。写真は2枚ともセピア色を呈する。他の写真とは状況が異なり、床面から背面上方にかけて捲し上げられた大型の撮影用背景紙を用いて撮影されている。「たたらはま第12号横穴」と記載された立て札が写し込まれる。

資料⑤は、完形の菊花型青白磁合子の写真。真上からを3枚(カラー1、モノクロ2)と、蓋をずらした状態を斜め上方から写したモノクロ写真1枚の計4枚を配置する。後者の写真には「構内洞穴出土 観音崎自然博物館」と書かれた紙札が写し込まれている。貝砂上で撮影されており背面には岩盤壁が見える。

以上、各資料に撮影者の情報はないが、前述した調査当時の状況から、屋外写真は出土時に■■■■氏が撮影した可能性も考えられる。室内で撮影されたと思われる資料①、②、④は、遺物復元時に赤星氏が撮影したものであるか。

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

本横穴群は、現在では前面に広がるたたら浜海岸に因み『たたら浜横穴群』（横須賀市No.19）として周知されている。横穴はこれまでに20穴を確認しているが、谷戸内に展開する一群から南方に離れ海岸際に立地する18、19号穴は横穴墓ではなく、海波による浸蝕作用で形成された海蝕洞穴である。

赤星氏が修復したと記録に残る遺存状態の良好な遺物は、現在もたたら浜に隣接する観音崎自然博物館内に展示されており、土師器坏・高坏・甕、須恵器坏・高台付坏・蓋・長頸瓶・横瓶・広口壺・広口長頸瓶・大瓶、青白磁合子、切子玉・丸玉(ガラス)、刀子、鉄鏃、金銅製薄板など計28点を数える。展示遺物には資料①～⑤の遺物も含まれており、博物館のご協力を得て実見および計測をさせて頂いた。以下、現地にて簡易に計測した各遺物の法量と、器形や調整などの特徴を記す。

資料①：口径9.8～9.9cm×器高3.6cmの半球形小型の土師器坏。口縁2ヶ所をわずかに欠くが遺存状態良好。胎土は緻密で砂粒を含まず、色調は橙褐色。内面に口縁端部まで正放射状暗文を施し、口唇部内端に面(弱い沈線)をもつ。外面には底部、体部に分け、それぞれ横方向の精緻なヘラ磨き調整を施す。器壁は薄く硬質で、口縁内面の一部には器表が薄く剥離する箇所が認められる。器形、胎土、調整などの特徴から、この坏は畿内産土師器と考えられ、全面に精緻な暗文・ヘラ磨きを施す特徴や口径・器高の比率から、年代的には東日本に畿内産土師器の流通が始まる飛鳥Ⅱ期(7世紀第2四半期)まで遡る可能性がある。県内では大磯町下田横穴8号墓、藤沢市森久横穴南斜面20号墓、藤沢市代官山遺跡、横浜市長者原遺跡に類例がみられる。18号穴(海蝕洞穴)から出土。

資料②：底部内面に螺旋状暗文、体部内面に斜め方向の放射状暗文、体部外面に横方向のヘラ磨き、底部外面に横(同一)方向のヘラ磨き調整を施す盤状坏。内外全面に赤色塗彩を施す。口径16.0cm×底径12.3cm×器高2.9cmを計測。平底で体部は開き気味に立ち上がり口縁付近でやや外反する。遺存状態は良好で口縁一部を僅かに欠くのみ。器形、赤彩、調整などの特徴から南武蔵地域所産の搬入品と考えられ、年代は8世紀前半に比定できる。15号穴から出土。

資料③：須恵器高台付坏は口径12.2cm×底径10.7cm×器高5.3cmを計測。器壁は直立気味に立ち上がり口縁付近でやや外反する。高台部の高さは1.8cmを測り八の字型に開く。須恵器蓋は所在不明。展示遺物にあった須恵器蓋2点はいずれも摘み部が擬宝珠型を呈することから資料③とは明らかに異なる。高台付坏の形状および写真にみえる蓋の特徴を合わせ、湖西編年のⅢ-3期後半(7世紀末)に比定できる。3号穴出土。

資料④：胴部に丸みを持つ須恵器長頸瓶。頸部が短く口縁部にかけて緩やかなラップ状に開く。口径10.1cm、頸部底径5.35cm、胴径16.1～16.8cm、底径8.5～9.0cm、器高22.1～23.0cm、胴部長15.3cm。東海地方の所産か。器形からみて奈良時代以降、平安期まで引き継がれるものと考えられる。12号穴から出土。

資料⑤：北宋代、景德鎮窯製の菊花型青白磁合子。径6.3cm×器高3.3cm(蓋1.6cm、身1.7cm)を測り、蓋上面には草花の浮模様を有する(図11、赤星氏の実測図を参照)。同様の小型合子片は鎌倉市域では13世紀代～14世紀前葉にかけて比較的多くみられるものの、他地域での出土は少ない。完形の類例は稀少であるが、本横穴群の西方約7.8kmに所在する衣笠坂の台経塚から同じく完形の景德鎮窯製青白磁合子が出土している。18号穴(海蝕洞穴)から出土。

資料①～⑤は出土遺物の中から特徴的なものを選出した記録写真と考えられるが、なかでも資料①の畿内産土師器坏と、同穴出土の資料⑤景德鎮窯製青白磁合子は類例少なく特筆される。

資料①、⑤が出土した18号穴(海蝕洞穴)は標高5.6mに立地し、奥行き2.6m、幅4.5mを計測する。当時の出土状況をみると「洞穴底部から古墳時代の土師器坏・高坏、須恵器坏、鉄製無茎鏃が出土」とあり、器形や暗文などの特徴にはふれられていないものの、この土師器坏が資料①と考えられる。続いて「その上位に灰層を含む厚さ25～35cmの貝層が堆積し、直上から成年・未成年の人骨2体が乱れた状態で検出され、貝層を覆う厚さ27～30cmの岩塊を含む土層の上部から青白磁合子が出土(中略)」とあり、合子の蓋・身は離れた箇所から見つかったことが別記録に記されている。また、洞穴西壁面には高さ31cm、幅18.5cmの連座上に座する仏像の線刻画が残されており、その右脇には高さ18cm×幅9cmの舟形光背と思われるものが立ち、さらに右上に直径9cm程の人の顔が彫られている(写真6、観音崎自然博物館展示の石膏標本を参照)。

海蝕洞穴内に見られる灰層・炭化物層と貝層の互層堆積は、三浦半島や対岸の房総半島に共通して認められる特徴で、古くは海水中での自然堆積層と考えられていたようだが、後の研究によって居住、漁労などを主体とした人為的な生活痕であることが明らかにされている。活動の時期は弥生時代～古墳時代前期にわたり、同期の遺物を包含する互層状の堆積層が厚く明瞭に観察される。しかしながら前述の「洞穴底部から古墳時代の土師器坏・高坏、須恵器坏、鉄製無茎鏃が出土」という記録をみる限り、18号穴は古墳時代後期には洞穴底面が露出していたことになり、それ以前の堆積層や出土遺物の存在は認められない。

[掲載図書]

1. 日本考古学協会1954『日本考古学年報』2 神奈川県観音崎横穴発見 赤星直忠
2. 神奈川県県民部県史編纂室1979『神奈川県史』資料編20考古資料
3. 三浦古文化研究所1966『三浦古文化』(1) たたら浜横穴群概要 赤星直忠
4. 横須賀市教育委員会1981『横須賀市文化財総合調査報告書』第1集 一浦賀地区一 考古資料調査概要 赤星直忠
5. 横須賀考古学会2009『三浦半島考古学事典』たたら浜横穴墓群 岩楯英子・剣持輝久

[掲載図書概略]

図書1には資料⑤の遺物実測図が掲載(図11)。図書2には資料⑤の遺物写真と出土した18号洞穴の開口部近景写真が掲載される。図書4には資料④の遺物写真と法量が掲載。ただし、図書2、4の遺物掲載写真は本資料とは異なるアングルの写真である。その他、図書3、5に各横穴の遺物の有無や器種および出土数が記されているものの、資料①～③の写真や実測図、法量などを掲載する図書はない。たたら浜横穴群についての記述では、横穴の形態観察や出土遺物の年代観から7世紀後半を中心として構築され8世紀後半にかけて使用されたとともに報告されており、同様の年代観を示す腰越遺跡との関係性が指摘されている。なお、赤星氏は図書3において横穴墓17穴の報告をしているが、海蝕洞穴である18、19号穴は除外されている。

[小結]

海蝕洞穴は、現在までのところ神奈川県内において三浦半島のみが存在が認められるもので、その地域的な特異性ととも、人々が海蝕洞穴をどのようにして利用してきたかが、古くからの研究対象となってきた。赤星氏を筆頭にしたこれまでの研究によって、三浦半島における海蝕洞穴の利用は古くは縄文時代後期に遡り、弥生時代から古墳時代前期を通して漁労を伴う居住を主体とし、古墳時代後期以降は埋葬の場として使われる傾向が指摘されている。その傾向は、たたら浜18号洞穴の畿内産土師器坏と青白磁合子の出土例からも看取できるが、横穴墓が近在する古墳後期のみならず周囲にやぐらのみられない中世期においても埋葬の場として選ばれていることは興味深い。本例の洞穴葬を考える上で、特に中世期においては周辺遺跡との関連もふまえて考察する必要があるだろう。

なお本調査には、河野えり子氏(公益財団法人 観音崎自然博物館)、稲村繁氏(横須賀市自然・人文博物館)、押木弘己氏(鎌倉市教育委員会)のご教示、ご協力を賜りました。文末であります御礼を申し上げます。

(長澤)

引用・参考文献

1. 西 弘海 1986『土器様式の成立とその背景』
2. 横須賀考古学会 1984『三浦半島の海蝕洞穴遺跡』
3. 大塚真弘・野内秀明 1986 昭和59年度博物館教室「三浦半島の考古学」野外学習調査概報『横須賀市博物館館報』(33)
4. 鈴木敏則 2001「湖西窯古墳時代須恵器編年の再構築」『須恵器生産の出現から消滅 第5分冊 補遺・論考編』
5. 田尾誠敏 2002「暗文土器からみた相模における畿内の影響」『神奈川県立歴史博物館総合研究報告』
6. 江口 桂 2006「盤状杯の出現とその背景」『吉岡康暢先生古希記念論集 陶磁器の社会史』

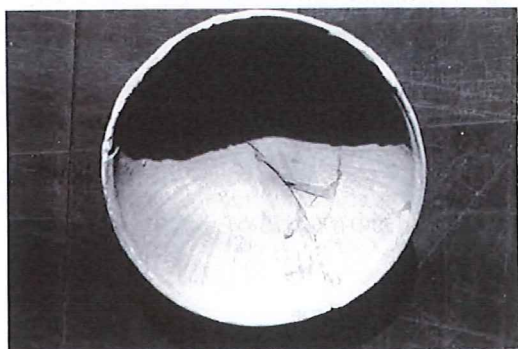


写真1 資料①(モノクロ写真のみ)

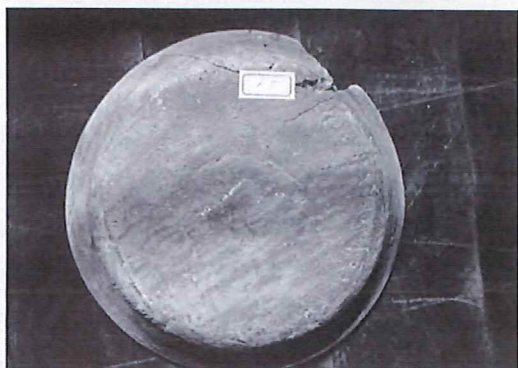


写真2 資料②(モノクロ写真のみ)



第10図 たたら浜横穴群分布図(昭和59年度に作成)

※掲載図書5より転載



種穴の年代推定に充分役立つ須恵器

写真3 資料③



写真4 資料④

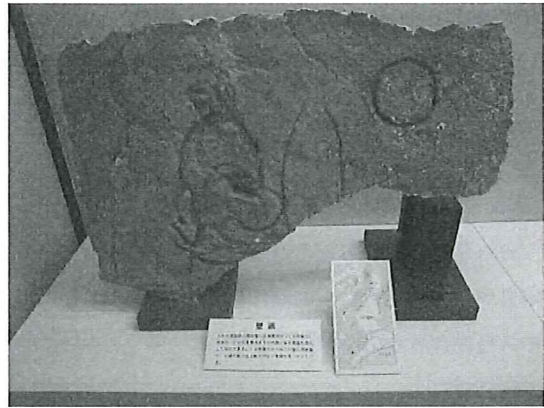


写真6 18号穴(海蝕洞穴)線刻画の石膏標本
観音崎自然博物館 蔵

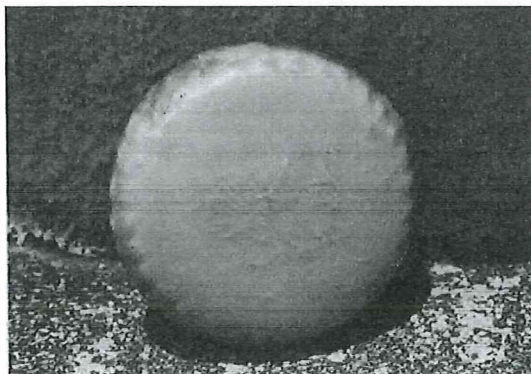
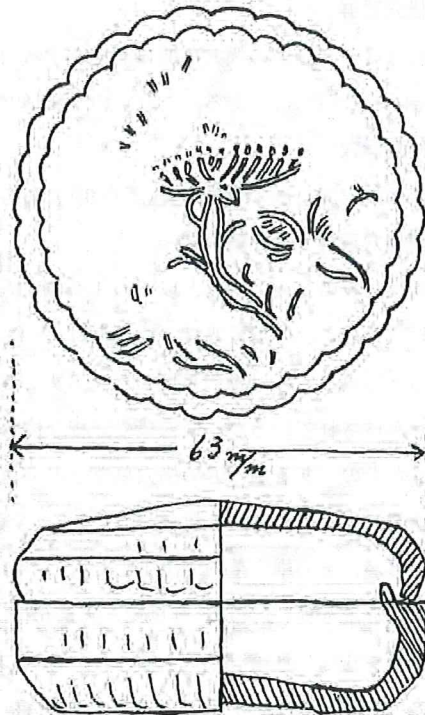


写真5 資料⑤



第00図 横須賀市観音崎洞窟出土白磁花形合子(赤星附図)

第11図 ※掲載図書1より転載

年報番号03097 横須賀市 高山横穴 横須賀市田戸台58
島崎横穴・島崎洞穴・鴨居洞穴 鴨居2丁目
かもめ島洞穴 泊町（在日米海軍横須賀基地内）

1. 赤星ノートの内容

[調査(踏査)年月]

資料が収められている封筒は日本地質学会から県立博物館に宛てられたものであるが、料金別納郵便の為年月等の情報は無い。封筒内の写真についても、「大正の頃」というキャプションがある1枚以外には撮影年月は記されていない。

[資料概略]

資料は「横須賀古写真とメモ 大正期のものあり」という墨書がある封筒に入った15枚の写真である。これらの写真は赤星氏のキャプションによれば「高山横穴(群)」(写真7・8)、「かもめ島洞穴」(写真9)、「鴨居洞穴」(写真10)、「島崎洞穴」・「島崎横穴」(写真11・12)の4遺跡に関連するものであるが、このうち「島崎洞穴」・「島崎横穴」という遺跡は横須賀市には存在しない。しかし、「島崎」のキャプションを付された写真が後述する赤星氏の複数の文献で同市に所在する鳥ヶ崎横穴墓群・洞穴の記述に使用されていたことから、「島崎」の資料は「鳥ヶ崎」の資料と判明した。よって、今回これらの資料は「鳥ヶ崎横穴墓群」・「鳥ヶ崎洞穴」の資料として紹介する。また、「島崎洞穴」の写真の中に「鴨居洞穴」の写真と同じアングルのものであることから、「鴨居洞穴」は「鳥ヶ崎洞穴」として紹介する。

高山横穴墓群

資料は5～7箇所の横穴墓開口部を有する斜面の近景写真(写真7)と、横穴墓内から外側を撮影したと見られる写真(写真8)である。これらの写真がどの横穴墓をどこから撮影したかといった記載はない。

かもめ島洞穴

資料は洞穴開口部の近景写真(写真9)である。撮影年月などの記載はない。

鳥ヶ崎横穴墓群・鳥ヶ崎洞穴

資料は12枚の写真であり、以下の4種類に分けられる。

1. 横穴墓(洞穴?)近景写真3枚(写真11-①、写真12-①・⑧)…それぞれ異なるアングルで撮影されている。写真11-①は横穴墓開口部と3人の男性を撮影したもので、「島崎最初の横穴」というキャプションが付されているが、横穴墓の詳細な情報は無い。写真12-①・⑧は複数の開口部を有する斜面を撮影したものであるが、どの横穴墓をどの方角から撮影したものかなどの情報は無い。
2. 遺物の出土状況写真2枚(写真11-③、写真12-⑦)…写真11-③には「島崎横穴大甕出土」と書かれているが、どの横穴墓内で出土したものか等の記載や「大甕」についての詳細な情報は無い。
3. 洞穴近景写真(写真10、写真12-②～⑥)…写真10には「鴨居洞穴」というキャプションがあり、写真12-②～⑥は「島崎洞穴」と題された台紙に貼られている。洞穴開口部と白いシャツの男性を撮影したもので、開口部の床から天井までの約半分ほどに堆積した覆土を確認できる。
4. 風景写真(写真11-②)…「島崎大正の頃」というキャプションがある。海岸と丘陵先端部を撮影したもので、手前には当時の集落が写っているが、正確な場所は記載されていない。

2. 記載資料の整理

[遺跡・遺物概要]

高山横穴墓群

横須賀市田戸台に所在し、大正11(1922)年に赤星氏によって発見され、大正11・13年には氏による5回に亘る調査でA～Eの5支群計57基の横穴墓が確認された。その後も赤星氏や調査機関による数回の調査で計60基の横穴墓が確認されたが、調査以前の改変・消滅を考慮すれば、より多くの横穴墓が存在したと思われる。現在は土木工事などによって大半が消滅している。写真7は、平成11(1999)年の同横穴墓群調査報告書(上田・依田1999)によれば、大正11・13年の調査時にC支群とされた横穴墓の一部を撮影したものと推定され、消滅した横穴墓を記録した貴重な資料といえる。

こうした発掘調査全体では土師器・須恵器のほか、直刀片・鉄鏃片、耳環・ガラス製小玉などの遺物が出土したがその数は少量で、横穴墓の構築時期を特定する遺物も少ない。しかし玄室構造などもふまえると、この横穴墓群は6世紀から8世紀前半代にかけて構築されたと考えられる。

かもめ島洞穴

横須賀市泊町に所在するとされるが、在日米軍基地内であることから正確な位置や現在の状況は不明である。土取り工事中に洞穴内から人骨が出土したことを契機として、赤星氏、■■■■氏らによって3回の調査が行われた。この結果、厚さ1mの堆積土に4層の埋葬面が確認され、多量の人骨が出土したが、洞穴内部の崩落がひどかったために完掘には至らなかった。最下層からは人骨とともに土師器坏・甕、直刀片、鉄製六窓鏢などが出土し、その他にも刀子や土師器などが出土した。これらの遺物は現在、横須賀市自然・人文博物館に収蔵されているが、残念ながらその帰属層位は不明となっている。しかし、土師器の年代が7世紀後半～8世紀初頭と平安時代に年代づけられることから、この洞穴は古墳時代終末期～奈良時代初頭には葬送の場として機能していたと考えられ、平安時代にもその可能性があると考えられている。写真9はこの調査の開始時に撮影されたものとみられ、赤星氏によれば発見当時のものである(赤星1970)。

鳥ヶ崎横穴墓群

横須賀市鴨居に所在する東京湾岸最大規模の横穴墓群であり、約60基の横穴墓が構築されていた。現在では丘陵東側の横穴墓群は大正期の土取工事によって消滅し、南斜面の横穴墓群が一部残るのみである。

この横穴墓群は幕末の台場建設の際には既にその存在が知られていたが、大正11年にセメント材料の土取工事によって横穴墓が発見されたことを契機として赤星氏らによって本格的調査が行われた。昭和42(1967)年までに4回に亘る調査が実施されたが、その数は総計15基と全体の約1/4にすぎない。初期の調査では赤星氏の調査方法も確立されていなかったことから個々の構造や規模については不明な部分も多いが、横穴墓自体が消滅したこともあり、後述する氏の調査報告が重要な資料となっている。

これらの調査全体では多様な種類の横穴墓が確認され、土師器・須恵器のほか、直刀・鉄鏃、勾玉・管玉、鉄釧・鉄製耳環、小型倣製鏡や銅鏡などの多様な副葬品が出土した。これらの遺物などからこの横穴墓群は6世紀末葉から7世紀代を通して継続的に構築され、8世紀前葉頃まで追葬が行われたと考えられている。赤星氏の調査によるA・B・D・H号横穴墓出土遺物の大半は昭和4(1929)年に東京帝国大学考古学研究室と東京帝室博物館に寄贈されたが、神奈川県立博物館、横須賀市自然・人文博物館、赤星直忠博士文化財資料館が保管している採集品を含む多数の遺物はその帰属が不明となっている。

鳥ヶ崎横穴墓群調査は赤星氏自身がその横穴墓研究の出発点と評するほど重要なものであり、その調査経

緯は以下のようなものであった。大正11年、土取工事に伴って3基の横穴墓が発見されたという知らせを友人・■■■■氏から受けた赤星氏は■■■氏とともに現地を訪れて最初の調査を行い、更に別の2基の横穴墓を発見した。写真11-①はこの調査時に発見された2基の横穴墓と飯田氏を撮影したものである。この調査で赤星氏らは総計54基の横穴墓を発見した。

2度目の調査は大正13年に土取工事が再開されたことによって再び横穴墓が破壊されているという知らせを受けた赤星氏と、当時氏が勤めていた豊島小学校の同僚で、考古学・民俗学を共同調査していた■■■■氏によって始められた。その後、赤星氏は■■■■氏や石野瑛氏らと休日調査を行い、4基の横穴墓(A～D横穴)を約半年間がかりで調査した。写真12-①・⑧はこの調査時にこれらの横穴墓を撮影したものとみられるが、どれがどの横穴墓であるかは不明である。これは調査された横穴墓が消滅していることに加え、それらが要塞地帯・砲台周辺に位置していたことから調査報告にはその位置図や写真が多くは掲載できなかったためである(赤星1925)。

写真11-③、写真12-⑦もこの調査時の資料で、C号横穴墓内の遺物出土状況写真である。この横穴墓は玄室平面形が前壁のない無花果形であつたらしく、鉄製耳環・直刀・刀子・鉄鏃・土師器杯・同盤・須恵器高杯・同提瓶・同脚付長頸壺・同甕が出土した。これらの写真は横穴墓右奥隅から出土した須恵器甕(型式等不明)出土状況を撮影したもので、報告によればこの甕は器高43cm、口縁径23.3cm、胴部径41.5cmであつたらしい(赤星1925、1970)。

赤星氏による3度目の調査は大正15(昭和元)(1926)年に実施され、最初の調査で発見された横穴墓のうちの5基が調査され、昭和42(1967)年には氏の4度目の調査として、新たに6基の横穴墓が発見・調査された。写真11-②は赤星氏によれば「大正末年の鳥が崎」であり、この写真の「山端をめぐったところあたりから横穴群があつた」ことから(赤星1970)、大正15年頃に横穴墓群・洞穴が存在した丘陵先端を北側から撮影した風景写真であるとみられる。

鳥ヶ崎洞穴

横須賀市鴨居に所在していたが、土取工事に伴って消滅した。大正13年に鳥ヶ崎A～D号横穴墓の下方で発見され、赤星氏と■■■■氏が確認した。内部の調査は赤星氏からその存在を知らされた東京帝国大学人類学教室の小松真一氏が行ったが、その後赤星氏も掘り残されていた奥壁周辺を再調査した。現在は赤星氏の調査記録のみが残っており、洞穴自体が消滅したこともあって、後述する氏の報告が重要な資料となっている。写真10、写真12-②～⑥は赤星氏らが洞穴を訪れた際に撮影されたもので、写っている男性は■■■■氏である。

赤星氏の調査では開口部幅5m、奥行6mの洞穴内から弥生時代の漁労活動を示す遺物と、古墳時代後期に年代づけられる、直刀・刀子・鉄鏃・珠文鏡といった遺物が出土した。これらは赤星氏が約20体分と推計した人骨の周囲で出土したことから、この洞穴は古墳時代後期には周囲の横穴墓とともに葬送の場として機能していたと考えられる。写真12-①は鳥ヶ崎洞穴の近景写真であり、前号で紹介した03007に含まれていた「鳥ヶ崎洞窟」近景写真と同じアングルで撮影されている。この写真は下方が暗いために明確に確認できるものは複数の横穴墓開口部のみであるが、「洞穴」というキャプションから考えると、写っている横穴墓は鳥ヶ崎A～D号横穴墓で、右下の大きな黒い空間が鳥ヶ崎洞穴開口部である可能性がある。

[掲載図書]

- A. 上田薫・依田亮一 2000 『高山横穴墓群(2次)』 かながわ考古学財団調査報告87 (財)かながわ考古学財団
- B. 赤星直忠 1924 「鴨居洞穴の発掘」『考古學雑誌』第14巻第12号 日本考古学会
- C. 赤星直忠 1925 「相州鴨居の横穴(三)終」『考古學雑誌』第15巻第11号 日本考古学会
- D. 赤星直忠 1970 『穴の考古学』 学生社
- E. 神奈川県県民部県史編纂室 1979 『神奈川県史 資料編20 考古資料』 神奈川県
- F. 古墳時代研究プロジェクトチーム 2013 「考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡(10) - 通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介 -」『かながわの考古学』研究紀要18 (公財)かながわ考古学財団

[掲載図書概要]

- A…高山横穴墓群の発掘調査報告書。写真7の撮影時期などの推定が行われている。
- B・C…赤星氏による鳥ヶ崎横穴墓群・鳥ヶ崎洞穴の調査経緯と図面を含む調査報告。写真12-④・⑤・⑦、11-③が掲載されている。
- D…赤星氏の複数の洞穴墓・横穴墓・やぐらについての調査内容や研究成果をまとめたもの。写真9～11、12-①～③・⑦がかもめ島洞穴、鳥ヶ崎横穴墓・洞穴の記述に伴って掲載されている。
- E…鳥ヶ崎横穴墓群・鳥ヶ崎洞穴に関する記述で、図版692として写真12-④・⑤が掲載されている。
- F…赤星ノートの古墳時代に関する資料の報告である。03007に写真12-①と同じアングルの写真が含まれ、「鳥ヶ崎洞窟□□」というキャプションが付されていた。

[小結]

横須賀市は横穴墓群と海蝕洞穴が密集する地域である。なかでも海蝕洞穴には古墳時代の洞穴内埋葬が見られるものがあり、鳥ヶ崎洞穴、かもめ島洞穴もそうした洞穴である。洞穴内埋葬と横穴墓は隣接することが少なくないが、洞穴か横穴墓かという違いは被葬者の階層差などを表すものではなく、横穴墓の代用として洞穴が利用されたものと考えられている。これは洞穴内埋葬に伴う副葬品に横穴墓のそれと同じ、あるいは鳥ヶ崎洞穴の銅鏡のように、周囲の横穴墓には必ずしも見られないような貴重なものが含まれるためである。しかし、洞穴内埋葬が行われた海蝕洞穴には、かもめ島洞穴のようにその周囲に横穴墓を伴わずに単独で存在するものがあることや、様々な規制のもとに地形を改変して構築される横穴墓ではなく自然に形成された海蝕洞穴を改変せずに使用する、ということなどを考えると、意図的に海蝕洞穴を葬送施設として選択したという可能性もあると思われる。今回の資料は既に消滅した、あるいは現状が不明な横穴墓・洞穴に関するものであり、洞穴内埋葬と横穴墓の関係の一端を考察できる貴重な資料であると言える。(吉澤)

遺構・遺物概要の引用・参考文献

- 赤星直忠 1924a 「鴨居洞穴の発掘」『考古學雑誌』第14巻第12号 日本考古学会
- 赤星直忠 1924b 「其後の鴨居洞穴の発見遺物」『考古學雑誌』第14巻第13号 日本考古学会
- 赤星直忠 1924c 「相州浦賀町鴨居の洞穴」『考古學雑誌』第14巻第13号 日本考古学会
- 赤星直忠 1925 「相州鴨居の横穴(一～三)」『考古學雑誌』第15巻第8・9・11号 日本考古学会
- 赤星直忠 1970 『穴の考古学』 学生社
- 上田薫・依田亮一 2000 「高山横穴墓群(2次)」『かながわ考古学財団調査報告』87 (財)かながわ考古学財団
- 神奈川県県民部県史編纂室 1979 『神奈川県史 資料編20 考古資料』 神奈川県

研究紀要19

かながわの考古学

発行日 2014(平成26)年3月20日

発行 公益財団法人かながわ考古学財団

〒232-0033 神奈川県横浜市南区中村町3-191-1

TEL: 045-252-8689 FAX: 045-261-8162

<http://kaf@kaf.or.jp>

印刷 野崎印刷紙器株式会社

KANAGAWA NO KOUKOGAKU

Vol.19

(Bulletin of KANAGAWA Archaeology Foundation)

CONTENTS

Project Team for Paleolithic Studies : Distribution of Paleolithic Artifacts in Kanagawa Prefecture (7) Layer B2 (draw a conclusion)	1
Project Team for Jōmon Period Studies : Change of the Jōmon Culture in Kanagawa Prefecture (VIII) : An Example in the first part of Late Period. An Aspect of the Horinouchi-Type Pottery Period,Part 5	13
Project Team for Yayoi Period Studies: The Corpus of Yayoi pottery-Coffin in Kanagawa Prefecture (3)	17
Project Team for Kofun Period Studies: Track of Dr. Naotada Akaboshi, A Pioneer of Archaeological Research in Kanagawa Prefecture (11): A Report of Materials of the Kofun Period in the So-called "Akaboshi Note".....	29
Project Team for Nara-Heian Period Studies: Hardware in the Nara and Heian Periods in Kanagawa Prefecture: The Corpus of iron manufacturing artifacts (4)	43
Project Team for Early Modern Age Studies: The Corpus of Common Houses in the Early Modern Age (9)	57
Kaori Takahashi : Japanese ceramic tile production system upward the provincial monastery established in Sagami :About the trend of the tile artisan between <i>Kokubun-ji</i> , <i>Kokufu</i> , and interior Buddhist temples	71

March, 2014

KANAGAWA Archaeology Foundation

Yokohama, Japan